

## ワイトゲンシュタインの『確実性について』とムーア

鈴木徹也

### はじめに

一般に流通している哲学史上の定説において、ワイトゲンシュタインの遺稿である『確実性について』(Über Gewißheit)<sup>(1)</sup>は、通常、ワイトゲンシュタインのムーアに対する批判の結果生じたものであるとされる。すなわち、ムーアが論文「外的世界の証明 Proof of An External World」<sup>(2)</sup>において、「ある種の常識的な内容を持った命題については、それを証明することができなくともそれを知っているということが出来る」という主張をしたのに対し、ワイトゲンシュタインは同書において異を唱え、「通常、「私は……を知っている」という表現は、適切な状況において、またその根拠を挙げることが可能なきにのみ用いられうる表現である。一方でムーアが挙げたような常識的な内容を持つ諸命題はそもそも疑いえないものであってその真偽を問うことは無意味なのであり、それゆえそれを知っていると主張することも意味を持たないのである」といった反論を行ったとされる。また、このような主張を基に、さらに彼は『確実性について』の中で、これらの疑うことが無意味となる命題が集まることで、我々の判断の基となる「世界像」が生じてくる、そしてこれらの「世界像」は各個人の属する共同体によって承認されたものであり、その「共同体」において世代毎に受け継がれていくものである、といった内容の主張を展開していったとされる。

しかしこのような一般的に流布しているような解釈を念頭に置いて『確実性について』を読むならば、これとは相いれないような次のような事実に気づくことになる。すなわち、同書中でのムーアに対する評価が、当初の否定的なものから、同書の後半になるにつれ次第に肯定的なものとなっていくのである。ここで、『確実性について』が、ワイトゲンシュタインの晩年の草稿から知識や確実性といったテーマに関するものを抜き出し経時的に並べた著作であって、それゆえ彼の思索の変転を直接的に表したものであることを考えるならば、このような事実からは、先に示したような『確実性について』はムーアに対する批判の書である、という見方自体がそもそも本当に妥当なものであるのか疑問となってくるのである。

また、『確実性について』を読み進むにつれもう一つ気づかれるのは、先にあげた一般的な解釈に含まれるような「世界像」や「共同体」についての話題が頻出するのは同書のせいぜい前半三分の二程度なのであって、それ以降の箇所においては、その大半において、むしろこれらとは直接的には無関係な内容の議論が展開されていくということである。このことから、先に示したような一般的な解釈のみを『確実性について』の中心的な主張としてよいのかという疑問が生じてくる。

ここで、上記のような疑問についての説明として、私は以下のような事情を考える——すなわち、『確実性について』において「世界像」や「共同体」に関する事柄も確かに彼の積極的な主張ではあった。しかしながら同書での彼の主張はそれにとどまらず、同書の後半の部分で彼はさらに自分の思索を展開していった。そしてその過程で彼は、論文「外的世界の証明」におけるムーアの主張の真意を理解するに至り、その結果ムーアに対する評価が肯定的なものに変化した、と。

本論においてはこのような筆者の主張を論証していくことを目的とする。そのため本論文中の議論を以下の順で行っていく。まずは「1. ムーアの「外的世界の証明」について」で、同論中のムーアの主張について概観する。

ついで「2.『確実性について』の“標準”解釈とムーアへの評価の変遷」において、同書前半の、一般的に流布している解釈が妥当するような議論を行っている部分についてその概観を行い、同時に同書中でムーアについて言及されている箇所を挙げ、その評価の変遷について見ていくこととする。その後「3.『確実性について』第四部の議論について」において、同書後半の今まであまり検討されてこなかった箇所におけるウィトゲンシュタインの議論を追ひ、その後『確実性について』で最終的にウィトゲンシュタインがたどり着いたと私が考える地点についての素描を行う。「4.『確実性について』の先行研究」においては『確実性について』に関する他の研究者の成果を概観し前節で私が主張した立場とそれらとの関係について簡潔に記す。そして最後に「5.ムーアの「証明」の意義について」において、本論での先行する議論を踏まえ、ウィトゲンシュタインがムーアの議論に見出したその真意を明らかにしていく。

## 1. ムーアの「外的世界の証明」について

ムーアの論文「外的世界の証明」は一九三九年に発表されたものであり、もともとは英国で行われた講義の記録である。彼は二〇世紀初頭から、当時多大な影響力を持っていたブラッドリーらの観念論的哲学に抗することを目的に、観念論や独我論を批判し、また世界に対する常識的な見解を擁護するような一連の論文を発表していたが、それでもこの「外的世界の証明」以前の論文ではその批判はあまり積極的な形をとってはいなかった。例えば一九二五年に発表された論文「常識の擁護 A Defence of Common Sense」<sup>(6)</sup>においては彼はまずは「現在一つの生きている身体が存在する、それは私の身体である（中略）私は生れてから今までずっと、地表に接していたか、そこからあまり遠くないところにいた（中略）地球は私の身体が存在する以前に長年にわたり存在していた（中略）」

非常にたくさんの人々が、この長年の間に存在していた」などの常識的な立場から見て確実と思われる諸命題を多数列挙した上で、観念論や独我論の立場をとる人も事実上このような諸命題を受け入れて生活しているのであって、それゆえ自身の立場との間で齟齬をきたしているという主張を行ったが、このようにその批判は観念論・独我論の内含する矛盾を指摘するなどの比較的消極的な形をもつものであった。これに対し、この「外的世界の証明」においては、外的世界の存在を証明するという形で、より積極的・直接的な観念論・独我論批判がなされた。

ムーアは、われわれの外部に諸事物が存在することを証明できるとした上で、次のようなことをして見せる――すなわち彼は、まず右手を挙げ「ここに一つの手がある」と言い、次に左手を挙げ「ここにもう一つの手がある」と言うという一連の行為を実際に行つて見せた上で、こうして具体的な「空間において出会われる諸事物」の存在が少なくとも二つ示されたのだから、このことによつて外的世界の存在が極めて厳密に証明されたことになっている、としたのである。

ついで彼は、これが実際に厳密な証明になっていることを示すために、まずは厳密な証明が持つていくべき三つの特徴についてあげる。それは次のようなものである。

- ① 結論を証明するために挙げられた前提が、証明を行おうとする結論自体とは異なっているということ。
- ② 挙げられた前提は、事実であると私が知っていたことであり、信じられているだけで確実ではなかったり、たとえ実際に事実ではあつても私がそうであると知らないようなことであつたりはしないということ。
- ③ 前提から実際に結論が帰結するということ。

そのうえで彼は、先の自分の行為が、それぞれ次のような理由で実際にこのような条件を満たしているとする。

まず①については、前提は「ここに一つの手がある」および「ここにもう一つの手がある」という具体的かつ個別的な事態であり、これに対し結論は「我々にとって外的な諸事物が存在する」という一般的な事柄なのであって、この両者は確かに異なるという理由により条件を満たすとする。また②については、この前提となっている「ここに一つの手がある」および「ここにもう一つの手がある」ということを私は確かに知っていると言え、このようなことについて、私は知っているのではなく単に信じているだけなのであってそれが事実でないこともあり得る、というのは極めて馬鹿げたことである、ということとその理由にする。最後に③については、このような前提からこのような結論が帰結するということは極めて確かなことである、ということによるとする。

そして彼は同論文を終えるにあたり、自分のこのような証明に不満を感じる人もいるであろうと述べた上で、その不満の理由として想定されるものについて、以下の二つを挙げる。

その一つとして彼はまず、そのような人々が求めているのは自分が行ったような個別例を挙げての証明ではなく外的世界の存在についてのより一般的な証明であるからだろう、ということとを挙げた上で、彼は、しかしながら自分にはそのような一般的証明は出来ないし、そもそもそれが可能なことであるとも思えない、と述べる。

そして、彼はもう一つの理由として、そのような人たちは自分が前提としているような「ここに手がある」といった事柄を、そのままでは前提にできるのではなく、そのこと自体がさらなる証明が必要な事柄であるとみなすからであろうと想定する。そしてその上で、彼は、同論文のしめくりに当たる個所で、次のように記すのである。

そのような人が言わんとしているのは、私が思うに、ここに手があるということを私が証明できないのなら、私はそれを信念に属する事柄として認めなくてはならない、すなわち私はそれを知りえない、ということであろう。そのような見解は、哲学者の間ではきわめて一般的なものであるとはいえ、私が思うに、誤っ

ていると考えられ得るものである（中略）証明することが出来ない事物を私は知ることが出来る。そして（私が思うに）たとえ証明出来ないとしても、私が実際に確かに知っている事柄の中に、私の二つの証明の前提も属するのである。それゆえ、私がそれらの前提を証明しないという理由のみからこれらの証明に不満を抱く人がもしいるのだとしたら、彼らはそのような不満を抱く十分な理由を持つてはいないのだと私は言おう（4）

このようにムーアは本論の最後において、「証明することができなくても確実に知っている」と言いうる諸命題が存在するという主張をはっきりとしているのである。ここで、詳述はしないが、このような主張は‘Certainty’<sup>(3)</sup>や‘Four Forms of Skepticism’<sup>(4)</sup>といったムーアの同時期の他の論文でもなされており、この時期の彼の中心的な主張となっている。そして、このような彼の主張に対してワイトゲンシュタインが関心を示し、この問題について自らとりくむようになったのが、のちに『確実性について』としてまとめられるような一連の考察を彼が生み出すことのきっかけとなっているのである。

## 2. 『確実性について』の“標準”解釈とムーアへの評価の変遷

『確実性について』は、ワイトゲンシュタインが死去する二日前までに至る、彼の最晩年の一年半の時期に書いた草稿の中から、彼の遺稿管理者のアンスコムとフォン・ウリクトとが、知識や確実性といったテーマに関する内容を含む諸節を抜粋したことで生み出された書物である。これらの諸節は経時的に並べられており全部で六七六の節が同書に含まれている。

『確実性について』における議論は断片的で錯綜しており、まとまりを欠いたものとなっている。それでもそこでウィトゲンシュタインが積極的な主張として唱えている内容としては、ある程度、彼の研究者たちの間で一定のコンセンサスが得られているものが存在する。ここで、多くの解説書や事典類<sup>①</sup>において大同小異の形で共通してみられるそのような内容を、『確実性について』の一般に流布しているような典型的な解釈とみなし、『確実性について』の“標準”解釈と呼ぶこととする。このとき、この解釈に含まれる内容は、おおむね以下の三つの要素にまとめられることとなろう。

- ① (ムーアの提示した常識的な内容を持つ諸命題のような) ある種の経験命題は、我々が思考する際の枠組を形成している。そのような「枠組」を形成する諸命題を疑うこと、その真偽を考えることは端的に無意味なことなのである。
- ② ①のような真偽を超えた一連の諸命題がつくりだす体系を、「世界像」と呼ぶ。この「世界像」に含まれる諸命題は我々の判断や知的営みの基盤となっている。
- ③ 我々はこの「世界像」を、(本人が積極的に世界に働きかけ、発見的に見出すというよりはむしろ、) 共同体から訓練・教育により適切な行為の仕方を教えられることを通じて、受動的に習得させられる。これを習得することが共同体における言語ゲームに参入することの条件となる。

ここで、この三要素について、『確実性について』の解釈としての妥当性について考えていくことにする。といっても先に述べたように同書の内容は錯綜しており、その議論を追っていくのは困難なのであるが、ここではその各部の冒頭および終盤の数節について注目していくこととする。これは、次のような理由による——先にも記したよ

うに、『確實性について』の諸節は基本的にほぼ連日のように書かれたものであるが、例外的に各部の間にのみ各々数ヶ月づつのタイム・ラグが存在している。また、絶筆となった第四部を除く残りの三つの部においては、その各部の終盤の部分に、相互に関連した、比較的断定的かつ積極的な内容を持った一連の節が続いている。さらに、後続する部の先頭の数節においては、先行する部の終盤に断定的に述べられた自分の主張に対しての疑問や批判ととれる数節が並んでいる——このような状況を考えると、各部の間にブランクがあるということについて、次のような事情が推察される。すなわち、各部の終了の時点で、ワイトゲンシュタインは知識や確實性というトピックに関する自身の考察においてその段階での一応の結論に至り、いったんそれについて考察をおえた。しかし、しばらく時間が経つうちに自分の抱いた結論に対し次第に疑問が生じ始め、またその地点から考察を再開したのだ、と。このように考えるなら、各部の終盤の諸節が、ワイトゲンシュタインのその時点での一段落となる積極的な主張を行っている箇所として、『確實性について』の諸節の中でも相対的に重視すべき節になっていると言えるのである。

こうして各部の終わりの数節を見ていくならば、そこで気付かれることがある。それは、結論からいえば、上記の「標準」解釈の①③が、各々第一部から第三部におけるとりあえずの結論として主張されており、そしてそれは各部の冒頭において提示された問いへの一応の回答（あるいはその一部）にもなっているとみなしうる、ということである。例えば、第一部においては、冒頭の二つの節

一 ここにひとつの手がある、ということを君が知っているのであれば、それ以外のすべてのことも認めるであろう。

（これこれの命題が証明不可能であるということ、もとより、それがほかの命題からは導出できないということではない。どんな命題でもそれ以外の命題から導出されうる。ただ、その別な命題がはじめの命題より



確実性の乏しいものかもしれないことが問題なのだ。）

二 私——あるいは万人に——そう思われ、ということから、事実そうである、という帰結は出てこない。とはいうものの、ひとがこのことを有意義に疑いうるのかということは、問われるべきであろう。

に明確に表れているように、「ここに手がひとつある」というような類の知識、すなわち、より確実な命題からの演繹によってその確実性を導くことが出来ないような命題について、その命題が確実であるということをごとから導けばいいのか、という問題呈示から、その考察は始まっている。そしてこれに対し、第六五節で終わる第一部の終盤には

五八 「私が知っている云々」が文法的命題と解されれば、「私」にはもとより何の意味もない。この命題はもともと、「この場合疑いの余地は無い」とか、「私は知らない」という表現はここでは意味をなさない」ということを意味する。したがって当然、「私は知っている」にもまったく意味がないことになる。

五九 ここでの「私は知っている」は、一つの論理学的洞察である。

から始まる、一連の考察が記されているが、これらの諸節は冒頭の問いに対しての「この種の、われわれの思考の枠組をなす命題の確実性は、その命題の言語ゲームにおける文法的・論理的な位置に由来するものである」という回答であると解釈されうる。そしてまたこれらの箇所は「常識命題に対して真偽を問うということは無意味なこと

である」という「標準」解釈のテーゼ①が主張されている箇所であるとも考えられるのである。

次いで第二部についてであるが、同部においては冒頭に、

六六 私は実在に関して、確実性の度合いの異なる様々な主張を行う。確実性の度合いはいかにして示されるのか。そのような確実性の度合い（という考え方）はどのような帰結をもたらすのか。

と記されており、ここからワイトゲンシュタインは、現実到我々が用いる「確実だ」という表現が実際には多様な確実性の「度合い」を持つということとはなぜなのであるうかという問いを立てているのがうかがわれる。そしてそこから改めて枠組命題に関する考察を開始し、その過程で彼は、次第にこれらの枠組命題が体系性を持つということとを発見し、結果として第九三節および第九四節<sup>⑧</sup>という『確実性について』中で「世界像」という語が初出する節にいたる。この後しばらくは同書中に「世界像」という語は登場しないのだが、その後再び一九二節で終わる第二部の終盤において、

一六二 私はひとつの世界像をもっている。それは真であるのか偽であるのか。とにかくその世界像が、私のあらゆる探求、すべての主張を支える基体なのである。そしてこれを記述する諸命題が、みな同等に検証の対象となるわけではない。

として、われわれの探究や主張、判断の基盤として「世界像」という概念が登場する。そしてここから始まり、第一七五から一七九までの一連の節<sup>⑨</sup>で、ワイトゲンシュタインはいわば「主観的確実性」「客観的確実性」とで

も表現されうるような二つの概念を発見し、第二部冒頭の問いに対して回答を得ることとなる。すなわち、「私は知っている」という表現を用いて表明されうるような「世界像」に属する諸粹組命題については我々は「客観的」と言いうるような確実性を持つのに対し、そうでないような諸命題についての確実性を表明するときには、その確実性は、「世界像」による根拠を持たない、「主観的」なものにすぎない、とされるのである。もちろん「世界像」に関する確実性を表明する際、われわれはその命題の正しさを主観的にも確信しているわけだから、その主張は「客観的」「主観的」のいずれの意味においても確実性を持つことになる（第一七七節）のである。こうして第二部は終了するわけであるが、ここから明らかであるように、これら終盤の諸節、ことに第一六二節は、ちょうど「標準」解釈のテーゼ②に当たる内容を述べている箇所ともなっているのである。

さらに第二九九節で終わる第三部については、冒頭において

一九九 ある命題の真偽が確実であるとはどのようなことか。

とされ、改めて確実性の基礎や、我々の判断の基礎にある「世界像」の特徴に関する考察が再開される。もっとも、この第三部の議論は先行する二つの部と比べるとより議論が錯綜しており、またよりその思考が枝道に入ることが増えてきているため、その道筋を追うことは困難ではあるのだが、しかしながらそのような過程を経たうえで、同部第二六三節で

二六三 学童は自分の先生と教科書を信じるのだ。

とされたあたりから共同体の成員への「世界像」の教授に関する考察が始まり、途中に例えば

二七九 「信念の（引用者挿入）」体系は観察と訓育を通じて身につけられるものである。私は「学ぶ」という言葉を意識的に避けている。

といった、この教育が知的というよりは、むしろ訓練・しつけ的な性格を持つということを明確に示したような節を経て、最終的に、第三部の終了直前の第二九八節において、

二九八 われわれにとって絶対に確かであるとは、ひとりひとりがそれを確信することだけでなく、科学と教育によって結ばれたひとつの共同体にわれわれが属しているということなのである。

とされて議論を終える。すなわちここにおいて、確実性を決定するものとして「世界像」を用いるということについての理由として、我々が「共同体」に属しており、そして「世界像」はその「共同体」において受け継がれたものであるから、ということが挙げられているのである。そしてまた、これらの一連の節は「共同体」に関するテーゼ③を主張している箇所とも見られうるであろう。

以上、ここまでの考察から、通常流布している『確実性について』の「標準」解釈が、同書の第三部までの内容のおおむね適切な解釈になっていると考えられるということがおおまかに示されたとはいえるであろう<sup>(10)</sup>。しかしながら、『確実性について』は第四部まで続く書物である。そして、次節に示すように、私は第四部中には、これまでの「標準」解釈には吸収されないようなさらなる内容が含まれていると考えるのである。

本節の最後において、簡単に、同書中におけるムーアの評価の変遷について概観しておくこととする。同書においてムーアの名前が出てくる箇所は数十に及ぶのであるが、そのうち第三部までに出てくる場合には、そのほとんどが批判の対象として多かれ少なかれ否定的なニュアンスを帯びたものとなっている。例えば第二部に当たる第一七八節には

一七八 ムーアは「私は……を知っている」という命題を誤用した。

などと記されているが、このように第三部までにおいては、少なからぬ節でムーアの主張を端的に誤りだとみなすような記載がなされている<sup>(11)</sup>。そしてこれらの箇所において、ウィットゲンシュタインがムーアを批判する論点というのは、基本的には一貫していて、それは「本来『私は……を知っている』という表現は通常その主張に対し何らかの根拠を挙げることが可能なきにのみ用いることが許される表現なのであって、それゆえ枠組を形成する諸命題に対しては、それらを知っていると主張したりするのは無意味であるにもかかわらず、ムーアはそれらの諸命題を、『私は知っている』という表現を用いて積極的に真であると主張した」ということによるのであった。

これに対し、第四部に入ると次第に、ムーアの主張を誤りとして退けるのではなく、それどころかむしろ、ムーアの主張にこれまで彼が気付いていなかった意義を発見し、それを肯定的に評価する箇所が増えてくるのである。その最初の箇所は次の連続する2節である

三八六 ムーアに倣って、「私は……を知っている」という人は、そのことが彼にとってどれほどの確実

度をもつかを示すのである。

三八七 誰かが私に問うとする。「あそこにあるのは木だ、君はポケットに金を持っている。それは君の足だ——君はどれくらい確かなのか。」答へは最初の場合には「不確か」であり、次の場合には「ほぼ確か」であり、第三には「疑いの余地なし」である。これらの問いは、たとい何の根拠もないとしても、有意味であることには変わりはない。例えば、「私の眼はあまりよくないから、あれが木であるかどうか、確かであるとはいえない」などという必要はない。私はこう言いたい。もしムーアが、「あれは木であることを私は知っている」と言うことで、きわめて具体的なことを言おうとしているのなら、ムーアの発言は確かに意味があったのだ。

すなわち、この2節においては、ムーアの主張は、それが具体的に捉えられるならば、意味があるものであることが見出され、そしてそのことが肯定的に評価されているのである。もっともこの箇所においては、その語用論的な意義は「自身の確実度を示すこと」であるとされている<sup>(12)</sup>。

さらに同様の語用論的な意義の確認は、次のような節にも見られる。

五一〇 「勿論私はあれがタオルだということを知っている」と言うとき、私はひとつの表出をしているのである。検証のことなど考えてはいない。私にとって、それはまったく直接的な表出である。私は過去を思わず、未来も思わない。(ムーアの場合も無論同じことであろう。)

それは端的に何かをつかむのと同じだ。私が疑いもなくタオルをつかむのと同じように。

五三二 木の前に坐っているムーアが、「私はこれが……であると知っている」と語ったとき、彼はその際の自分の状態について述べていたのである。

このように、これらの節においては、ムーアの主張は各々「直接的な表出」「自分の状態を述べること」として解釈されているのである<sup>(13)</sup>。

そして、全六七六節からなる『確実性の問題』の最後から三番目の節である第六七四節に至っては、ウィトゲンシュタインは次のように述べるのである…

私は間違えることはあり得ない、と正当に主張できるような場合がいくらもあり、それはまたいくつかの特定のタイプに分かれる。そしてムーアは、そうした事例の若干を提示したのであった。

すなわち、ここにおいてはウィトゲンシュタインはムーアの主張を、自分が今まで気づいていなかった事柄を提示しているものとして肯定的な形で評価しているということが見て取られるのである。

ここで本論文の冒頭に記したように、私は、このようにウィトゲンシュタインによるムーアの評価が当初の明らかに否定的かつ批判的なものから、肯定的なものへと変わっていったことについて、第四部においてウィトゲンシュタインの思索が“標準”解釈の時点よりもさらに前進し、その結果ムーアの真意を理解するにいたったことが、その理由となっているのだと考える。そのため、次節において、この第四部の議論を検討していく。

### 3. 『確実性について』第四部の議論について

第三〇〇節に始まり第六七六節に終わる第四部であるが、同部に入ってからもしばらくは、第三部の思考圏内での思索が続いていき、前部での結論となった「共同体」における知識の授受などについての補足的な考察が続いていく。しかしながらその後、第四部での思索が続いていくにつれ、次第にそこに、大きく二つの側面から、それまでの考察にはなかったような特徴がみられるようになってくる。

その一つは「枠組」を形成する命題として考察の対象となつていく命題の性質が次第に変化してくることである。これまでウイトゲンシュタインが「枠組」となる疑いえない命題として念頭に置いてきたものは、おおむね、例えば「百年前から地球は存在する」のような、状況によらず人間一般にとつて妥当すると考えられるようなものであるか、あるいは「ここに手がある」「ここに木がある」といった、少なくともその場に居合わせた人にとつては皆に均しく妥当すると考えられるような諸命題であった。このような特徴から、ここまで念頭に置かれていたこれらの命題を「公共的な」枠組命題と呼ぶことにする。これに対し、第四部においては、次第に考察の対象が、人間一般に妥当するのではなく自分にしか妥当しないような個人的な命題に変わっていくのである。ここでこの傾向は、第四七〇節で

私の名がL・Wであるということが疑われないのはなぜか。これはひとが何の疑いもまじえず、即座に確定できるような事柄とは全く違ふように見える。これを疑うべからざる真理のひとつと考える人はあるまい。

と記し、自分の名前に関する知識が、これまで考察してきたような「公共的な」枠組命題には含まれないにもか



かわらずやはり思考や判断の「枠組」として疑いえない命題になっていること、すなわち自分の名前についての知識が、例えば「地球は何千年も前から存在していた」のような世界についてのだれにとっても同様に確実な知識であるわけではなく、ただ自分自身にのみ個人的に妥当する命題であるのにもかかわらず、それでもやはりそれ自体は決して疑いえないものとして扱われ、もし別の事実や出来事との間で齟齬をきたすような場合にはまずはそれらの別の事柄のほうが疑われるべき命題として扱われるということ、に気付いたことからおおよそ始まる<sup>14</sup>。そして、このような、従来の公共的な枠組命題とは異なる種類の枠組命題が存在することに気付いたウィトゲンシュタインは、こののち例えば「自分が数日前にアメリカからイギリスにやってきた」といったような自分の個人的な生活史などもこのような、従来の「公共的な」枠組命題とは異なる資格を持ちながらもやはり「枠組」となっている命題であるとみなし、これについての考察を行っていくことになる。ここで、以下においてはこのような個人にのみ妥当するような枠組命題を、従来の「公共的な」枠組命題に対し「私的な」枠組命題と呼ぶこととする<sup>15</sup>。

そして、上述の変化とも関連しながら第四部でもう一つ生じてくるのは、「私は……を知っている」という表現に対しての見解の変化である。先述のように、もともとウィトゲンシュタインは、『確実性について』の最初のころは、「枠組」を形成する命題についてその真偽やそれを「知っているかどうか」ということを述べることは無意味であると考えていて、そしてそのような論点からムーアの「外的世界の証明」などでの主張を批判していた。しかしながら、私的な枠組命題の存在について気付き始めてからは、彼は自然な思考の流れとして、そのような私的な枠組命題を、他の人に伝える場面などについての考察を行うようになっていった。そしてその結果、いわばより語用論的に、彼は、「私は……を知っている」という表現について、それが「自分の枠組命題を他人に示す時に用いる表現」であるという積極的な意味合いを見出すのである。これは例えば、第六三二節において、彼によって「私は知っている」と同義に用いられている「私はそれを間違えるはずがない」という表現に対して

六三一 「私がそれを間違えるはずはない」とはある種の主張の標識である。

などと述べている箇所などに端的に表れている。ここで、この節中に現れる「私がそれを間違えるはずはない」という表現は、『確実性について』のごく初めに存在する第十六節で、

十六 『私が何かを知っていれば、私は自分がそれを知っていることも同時に知っている』が意味するのは次のことである。すなわち『私がそれを知っている』は『私がそれについて間違えることはありえない』と同義である、と。

と記されて以来、『確実性について』を通じて「私は知っている」と同義とされ続けている表現である。またこの第六三二節は、直前の第六二九節の

私が自分自身について『私は自分の名前を間違えない』と言明すればそれは正しく、『多分間違えているだろう』と言えば誤りである。

という節からの議論を継続している箇所であり、それゆえこの節にある「ある種の主張」というのは、明らかに「(例えば自分の名前のような)自身の枠組命題を他人に提示する意味合いを持った主張」を示していることになるであろう。他にも彼は第四部の別の箇所では、「私は知っている」という表現を「知っているということを保証する表

現(第四二四節)<sup>(16)</sup>」「自分の状態を示す表現(第五三二一および五七五節)<sup>(17)</sup>」などとしている。彼はこのように、第三部までは、「私は知っている」という表現の無意味さについて語っていたのに対し、第四部においては、より語用論的な観点から、「自分の枠組命題を提示する言語行為」としての「私は知っている」という表現を発見していたのである。

以上、ごくおおざっぱではあるが、第四部におけるウィトゲンシュタインの考察の進展に関する契機について見ていった。そしてこのような考察を経て、『確実性について』の第四部においてウィトゲンシュタインは、実際のところ、これまで「標準」解釈として捉えられていたような言語・知識観以上のものに自身の立場を拡張していたのである。それではその立場について、ここまでの議論をまとめ整理・解説しておくこととする。

まず、それ自体疑いえないものとして判断の基盤となる諸命題を枠組命題というが、この枠組命題のうちにはまず、共同体の成員全員に妥当するような「公共的」なものがある。この「公共的」枠組命題(これらの枠組命題の体系を「世界像」という)は共同体の一員たるため共同体の先行する成員である大人たちから受動的に習得させられるものであり、そのような一連の「公共的」枠組命題の大部分を共有していることが、その共同体の成員であるための条件となっている——ここまではおおむね「標準」解釈で主張されていることである。しかしながら、各個人はこのような「公共的」枠組命題を取得していきながらも、その一方で、共同体の成員全般ではなく「私」にしか妥当しないものでありながら、やはりそれ自体は疑いえないものとして判断の基盤としているような「私的」枠組命題もまた持つようになっていく<sup>(18)</sup>。このような「私的」枠組命題があるがために、同じ共同体内部の成員でも意見の対立が生じるのであり、しかしながらそのような対立を抱えた各成員でも、同じ「公共的」枠組命題を共有しているということで、同じ共同体に含まれており、それゆえある意味において「信頼できる存在である」と

いうことが保証されるのである。しかるに、例えば対立が生じたときなどに、各個人はその際に何が自分の判断のよりどころとなっているかを提示しないといけない状況に陥る場合がある<sup>(19)</sup>。ここで、このような際に用いられる表現が「私は知っている」なのであって、各個人はこの表現を用いて、自らの枠組命題を提示するのである。

以上、本節においては『確実性について』第四部の議論の内容を経時的に追っていき、またそれに先行する各部の議論も踏まえたうえで、最終的にウィトゲンシュタインが『確実性について』において到達したと私が考える立場について概観した。次いで、次節においては、この立場と先行する研究との関連についてみていくこととする。

#### 4. 『確実性について』の先行研究

まずは『確実性について』発表後の、同書に対してなされた他の哲学者たちの解釈史について概観していく。

まず『確実性について』の解釈が先の“標準”解釈へと固定していったことについては、ノーマン・マルコムの影響が強いのだと考えられる。『確実性について』にまとめられた一連の思索がなされるようになったことについてはウィトゲンシュタインとマルコムとの一九四九年に行われた議論がその契機となっている。そしてマルコムは、その議論の内容を、『確実性について』が出版される十年以上も前に、『回想のウィトゲンシュタイン』中に置いて発表していたのであるが、その内容はおおむね“標準”解釈そのままであった。それゆえ多かれ少なかれウィトゲンシュタインを研究する者にとっては、『確実性について』の内容についてすでに先入見を持っていたことになるのである。また『確実性について』の編集者の一人であるフォン・ウリクト自身も、同書が公表された直後の一九七一年に‘Wittgenstein on Certainty’<sup>(20)</sup>という論文を発表し、同論中にて『確実性について』の議論を要約しているのであるが、その内容も簡潔かつ明瞭な形で先の“標準”解釈の三要素を提示したものであって、このことも

“標準” 解釈が定着することの一つの要因となっていたと考えられる。

これらのこともあつてか、『確実性について』公表直後にこそいくつか同書に関する論文が発表されていたものの、それらの内容はほぼ“標準” 解釈を踏まえたものであり、また論文の数も次第に減つていき、一九八〇年代にいたつてはほとんど同書に関する論文は見られなくなっていく。

ここで、このような状況を変えたのがアブルム・ストロールであった。彼は一九八〇年代末から『確実性について』に関する一連の論文を著し始め、一九九四年にはその総決算として *Moore and Wittgenstein on Certainty*<sup>(2)</sup> という本を著した。同書や彼の先行する諸論文においては、それまであまり注目されていなかったムーアの諸論文についての考察を丁寧に行ったり、あるいはウィットゲンシュタインを哲学史上類のなかった新種の基礎づけ主義者<sup>(2)</sup> として取り扱ったり、といったようないくつかの新たな論点が含まれており、彼の業績については、それに関するアンソロジーが作られるほどの注目がなされていた。とはいうものの、これらの諸論文においても結局、ムーアに対する評価は従来の“標準” 解釈のまま“私は知っている”という表現に関して誤った主張を行い、ウィットゲンシュタインが『確実性について』としてまとめられる考察を行うきつかけを与えた人物” という、いわば当て馬的なものとどまつており、基本的な議論は“標準” 解釈の枠内でなされている、という印象を捨てることはできない。

さらに今世紀に入つてからはこのストロールの直接的な影響を受け、ムワイヤル・シャルロックが、基本的にはストロールの主張はそのまま受け継いだうえで、その内容をさらに詳細にした *Understanding Wittgenstein's On Certainty*<sup>(3)</sup> という研究書を発表した。同書中で彼女は、『探究』発表以降のウィットゲンシュタインの研究を、『論考』を著した第一期、それ以降『探究』までの第二期と比して、それと同等かそれ以上の業績をなしてあげているものとして、「第三のウィットゲンシュタイン Third Wittgenstein」と呼ぶことを提唱し、他の研究者とともに同時期のウィットゲンシュタインに関する同タイトル (*Third Wittgenstein*<sup>(4)</sup>) のアンソロジーや、さらには『確実性について』に

特化した *Reading of Wittgenstein's On Certainty* <sup>(25)</sup> というアンソロジーを編纂したりしている。このように、欧米においては今世紀に入ってから『確実性について』やそれを含む晩期のウィトゲンシュタインの研究はそれ以前よりもむしろ多くなされるようになっており、またこれらの研究の中にはいくつか注目するべき内容を含むものはあるのだが、しかしながらその内容は依然、基本的には「標準」解釈の枠内でなされているものばかりである <sup>(26)</sup>。また、先に記したように『確実性について』は経時的に本人の草稿を並べた形式をとっているにもかかわらず、(本論のような) そのことを考慮してなされた研究がほぼ皆無であるのも特徴的である。

一方で、我が国においても、最近に至るまでは、基本的に「標準」解釈の枠内で議論がなされたものがほとんどであったが、近年になって、この流れに収まらないオリジナルな研究がなされた。それが鬼界の一連の論文や著書 <sup>(27)</sup> におけるものである。これらの論文で鬼界は、まとまった内容の思考を含む連続した諸節を「シークエンス」と呼び、それら複数のシークエンスが『確実性について』中で断続的に展開されていく様態を説明することで、同書中の複数の思考が経時的に展開されていく過程を説明しようと試みている。そしてその過程において同書の後半になるにつれ私的な枠組命題が増え、ウィトゲンシュタインが最終的に公共的な枠組命題と私的な枠組命題の両者が各個人において併存するとみなすようになると考える点において、筆者と鬼界の意見は共通する。しかしながら私の見解と鬼界の見解にはいくつかの大きな相違もあるため、それについて以下に記すこととする。ただし紙数の関係で、本論においてはその相違点のうちの二点を簡単に指摘するにとどめるのみとする。

まず鬼界は、「世界像」に属さないような「私的」枠組命題を「私は……を知っている」という表現を用いて主張する際には、常に「無限定な最終認知責任」が生じるとする——すなわち、まず鬼界は、「私は……を知っている」と表明することによって、その発話者には、そのように特定の命題が真であるという主張をしたことに対しある種の責任が発生するようになるとし、それをその命題に対する「認知責任」と名付ける。ここで、そのような命題に

対し発話者が、例えば「誰々がそう言っていた」「これは論理的事実だ」などと言ったさらなる根拠を挙げる事ができるのならば、彼はその責任を他人や公的権利に回すことができるようになり、このような彼の「認知責任」は有限なものとなる。それに対し、「私的」枠組命題については、それ自体が無根拠なのであり、それゆえその責任を他者に委ねることができないということから、その発話者は自身の主張に対し全面的に責任を持たないといけないという「無限定な最終認知責任」を常に要求されるようになるのである<sup>(28)</sup>。しかしこの主張は私には過度のものであるように思われる。例えば典型的な「枠組」命題としてウィトゲンシュタインが挙げている自分の名前にしてからが、それは親に命名され、公共機関にそのような名前であるということをお届け出られ、といった風に多大な「公共性」の刻印を押されているものである。さらに先に示したように、共同体の各成員はおなじ「公共的」枠組命題を共有していることによって共同体の他の成員たちから「信頼」を獲得している。それゆえ鬼界の言うような「無限定な責任」を要求されるような場面というのは、皆無ではないにしても極めて例外的な状況にしか起こらないのであり、「枠組」を提示するようなすべての場面においてそのような極端な責任が課せられているというのは実情とは合わないのではないかと思われる。

また鬼界は、ウィトゲンシュタインが最終的に「私的な」命題の確実性を第一とみなすようになり、「公共的」な命題の確実性も「私的」な命題の確実性から起因するものであると考えるようになったという旨の主張をしている<sup>(29)</sup>が、この様な主張についても私は疑問を感じる。そもそも「世界像」の確実性が我々の原初的な反応のあり方や行為に基づくものであつてそれゆえ我々の本性に基づいた生得的、本能的な特性を多分に持つものであるのに対し、自分の名前などの私的な枠組命題は言語ゲームに参入していく際に二次的に獲得していったものである。このため、発生的な側面のみ考えても「公共的」確実性のほうが「私的」確実性に先んじるものと考えるのが自然なのでないかと思われる。



以上、本節においては先行研究について概観し、その結果「私的な」確実性の意義に注目しているのが私の知る限り鬼界のみであるということをまずは示した。その後に、鬼界と私の主張との相違点について最小限の記載をした<sup>(30)</sup>。

ついで次節においては、本論のまとめとして、ここまで行つた議論を踏まえ、ワイトゲンシュタインがムーアの主張に対し見出したものを示していくこととする。

## 5. ムーアの「証明」の意義について

本節の議論に先駆け、まず、枠組命題の持つ特徴について再確認しておくこととする。枠組命題は、それが「公共的」であれ「私的」であれ、それ自体は疑いえないものであった。それゆえ原理的に言つて、議論において論理的に改訂させることが可能なのは、枠組命題以外の諸命題だけなのであつて、枠組命題自体には理性的な議論によつて到達することは不可能ということになるのである。このような事情はワイトゲンシュタイン自身から引用するならば、以下の節に明らかである。（なお、この節でワイトゲンシュタインが想定しているのは、他の共同体に属する人物に対して、「公共的」枠組<sup>(31)</sup>に關しての対立が生じている場面であるが、それ以外にも対立が生じる場面としては、例えば、同じ共同体に属する人物が「私的な」枠組について衝突する場面や、あるいは、同じ共同体に属するということはその「公共的」枠組の「大部分」が一致するというものであるので、一部の「公共的な」枠組について同じ共同体内の人物が衝突する場合などがあるであろう。）

六二二 先に私は（相いれない原理を持った）他人を「攻撃」するだろう、と言つた——だがその場合、



私は彼に理由を示さないであろうか。勿論示す。だがどこまで遡るかが問題である。理由の連鎖の終わるところに説得がくる。(宣教師が原住民を入信させるときのことを考えてみよ。)

この節に表現されているように、我々が受け入れている諸命題には、理性的議論の対象となり、そのような議論で改訂されうる「非枠組命題」と、そのような議論の及ぶところではなく、それが改訂されるには「回心」のような論理を超えたものによるしかない「枠組命題」の二種類が存在することとなる。そこで、これを踏まえた上で、冒頭に挙げた「外的世界の証明」におけるムーアの主張をもう一度振り返ってみよう。

彼はまず、「ここに一つの手がある」という前提をもとに、そこから「外的な事物が存在する」という結論を論理的に引き出した。その後、このような「ここに一つの手がある」という前提に問題があるという反論を出す人物に次のような主張を行った。

証明することが出来ない事物を私は知ることが出来る。そして(私が思うに)たとい証明できないとしても、私が実際に確かに知っている事柄の中に、私の二つの証明の前提も属するのである。

今となるとこの主張の意味するところは明らかであると考えられる。すなわち彼はこの箇所で、「ここに手がある」という命題は「自分の枠組命題である」ということに自覚的であり、そしてそのことを明示的に表現しているのである。また彼は上記のような枠組命題と非枠組命題の区別にも自覚的であり、論理的な議論の行えるレベルにおいては極めて綿密な議論を行うのに対し、そのような議論のおよばない枠組命題のレベルについては「私はそれを確かに知っている」と言うにとどめ、それを、その性質上不可能な論理的議論の俎上に乗せることを慎重に避け

ているのである。すなわち彼は哲学による理性的な議論の届く射程を見極め、厳密にその射程内のみでの議論をおこなっているのである。無論ムーアがこのような主張を行ったからといって、その主張は論敵である観念論者のもつ枠組について、それを論理的な形で論駁するような効力はもちえない。しかしながら、日常生活のレベルでは常識的な枠組に従っていながら知的、哲学的な立場においてはそれを枠組として所有していないかのようにふるまう観念論者に対し、童話で子供が「王様は裸だ」と言うときのような形で、相手に「回心」を引き起こさせるような効力は、あるいは期待しうるのである。

そして、ウィトゲンシュタインがムーアの論文の中に見出したのは、自分の思索が最終的に至った地点にあるところのものを、すでにムーアが上記のような形で実践として示しているということだったのである。先に一度挙げたが、ウィトゲンシュタインが死去する二日前であつて、『確実性について』となる草稿の書かれた最後の日、まさにその日に書かれたムーアに関するコメントをもう一度引用してみる。

私は間違えることはあり得ない、と正当に主張できるような場合がいくつもあり、それはまたいくつかの特定のタイプに分かれる。そしてムーアは、そうした事例の若干を提示したのであつた。

この文章からは、ウィトゲンシュタインが、自身の立場の先駆者としてムーアを再発見したということが明瞭に見て取られる。無論、ムーアが直感的にしか捉えていなかった事柄、あるいはムーアが全く念頭にも置いていなかった事柄をも「枠組」や「世界像」などの語を用いて表現し、我々の言語実践や知識のあり方を明確な形であらわしたという点において、ウィトゲンシュタインの『確実性について』は哲学的にきわめて重要な著作である。（あるいはこのような明確化がなされず直感的な把握しかなかったがゆえに、ムーアは「実践」という形で示すしか他

に方法がなかったとも言えるのかもしれない)。しかしながら、少なくとも「私は……を知っている」という表現のもつ独自の意義を発見するということについては、ムーアはウィトゲンシュタインに先がけていたと言えるのである。

## 参考文献

- 鬼界彰夫 (1998a) 『確実性について』の主題と構造 (上)「筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』」
- (1998b) 『確実性について』の主題と構造 (中)「筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』」
- (1998c) 『確実性について』の主題と構造 (下)「筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』」
- (1999) 『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考 (1)——第二部 (§66-192) の分析を通じて——「筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』」
- (2000) 『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考 (2)——第三部 (§193-299) の分析を通じて——「筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』」
- (2001) 「ウィトゲンシュタイン最後の思考——『確実性について』第四部: §300-676 を巡って——」筑波大学現代語・現代文化学系『言語文化論集』
- (2003) 『ウィトゲンシュタインはこう考えた』講談社
- 小林道夫 (1998) 『確実性』岩波哲学・思想事典』岩波書店
- Malcolm, N. (1958) *Wittgenstein, A Memoir, with a Biographical Sketch by Georg Henrik von Wright* (London: Oxford University Press) (藤本隆志訳『回想のウィトゲンシュタイン』法政大学出版局)
- Moore, G. E. (1925) 'A Defence of Common Sense' in Moore (1959a)
- (1939) 'Proof of an External World' in Moore (1959a)
- (1959a) *Philosophical Papers* (London: George Allen & Unwin)

- (1959b) 'Certainty' in Moore(1959a)
- (1959c) 'Four Forms of Skepticism' in Moore(1959a)
- Moyal-Sharrock, D. (2004a) *Understanding Wittgenstein's On Certainty* (Hampshire & New York: Palgrave Macmillan)
- (2004b) *Third Wittgenstein: The Post-Investigation Works* (Aldershot, UK: Abgate)
- Moyal-Sharrock, D. & Bremner, W. H. (2005) *Reading of Wittgenstein's on Certainty* (Hampshire & New York: Palgrave Macmillan)
- 野家啓一 (1998) 『言語ゲーム』『岩波哲学・思想事典』岩波書店
- Stroll, A. (1994) *Moore and Wittgenstein on Certainty* (New York & Oxford: Oxford University Press)
- (2000) *Twentieth-Century Analytic Philosophy* (New York: Columbia University Press)
- 鈴木徹也 (2001) 「ワイトゲンシュタイン・ムーア・マルコムの三者関係からみた『確実性の問題』およびその解釈」(『東京大学科学史・科学哲学専攻修士論文』)
- Von Wright, G. H. (1971) 'Wittgenstein on Certainty' in von Wright(1982)
- (1982) *Wittgenstein* (Oxford, UK: Basil Blackwell)
- Wittgenstein, L. (1969) *Über Gewißheit* (Oxford: Basil Blackwell)
- 山本信・黒崎宏編 (1987) 『ワイトゲンシュタイン小事典』大修館書店

## 註

- (1) Wittgenstein(1969)
- (2) Moore(1939)
- (3) Moore (1925)
- (4) Ibid.p.150.
- (5) Moore(1959b). なお本論文は、一九五八年に発表されたムーアの論文集 (*Philosophical Papers*) において初めて発表されたが、内容自体は「外的世界の証明」とほぼ同時期の一九四一年にカリフォルニア大学でなされた講義の記録である。

- (6) Moore(1959c)
- (7) 紙数の都合により直接的な引用はしないが、これについては、例えば小林(1998)、野家(1998)、山本・黒崎(1987)、Stroll(2000)などを参考にしている。
- (8) 「九三 ムーアが「知<sup>1</sup>っている」ことを述べる諸命題は、ことごとく、その反対を信じる理由を想像することが困難な命題である。例えばムーアは生涯を大地からほとんど離れることなく過ごした、という命題のように。ここでも私は、ムーアでなく自分自身のこととして語ってよい。その反対を私に信じさせるようなものがあるだろうか。記憶であろうと、ひとの言葉であろうと。——私が見聞きしたことすべては、大地から遠く離れて存在した人間はいないことを確信させる。私の世界像にはその反対を信じさせるようなものは含まれていない。」
- 「九四 私の世界像は、私がその正しさを納得したから私のものになったわけではない。私が現にその正しさを確信しているという理由で、それが私の世界像であるわけでもない。これは伝統として受け継いだ背景であり、私が真と偽を区別するのもこれに依っているものである。」
- (9) 「二七五 私は「それを知っている」と他人に言う。この場合には正当化がある。私の信念については正当化はない。」
- 「二七七 私が知っていることはまた私の信じていることである。」
- 「二七九 「私は……と信じる」は主観的な真理性をもつが「私は……を知っている」はそうではない、という言い方は正しいかも知れない。」
- (10) なお、紙数の都合でこれらの第一部～三部における議論の内容の検討については、だいたい簡略化されたものとならざるを得なかった。この詳細については鈴木(2001)を参照のこと。
- (11) この他にムーアに対する否定的な言及がなされている箇所としては、例えば以下のようなものがある。
- 「九一 ムーアの確信には正しい根拠があることになるだろうか。根拠がないとしたら、ムーアは結局そのことを知<sup>1</sup>っているのではないことになる。」
- 「二五一 私はこう言いたい。ムーアは、彼が知っていると主張することを、実は知<sup>1</sup>っているのではない。ただそれはムーアにとつて、私にとつてと同様、ゆるがぬ真理なのである。」
- (12) これらの節だけをみるならば、ムーアが言おうとした具体的なこととしてウィトゲンシュタインが念頭に置いているのが、例え

ば、「薄暗い所で少し離れたところにおぼろげに見えているものが実際に木であるのかはつきりしない状況で、そのことについて尋ねられた場面」などのような非哲学的で極めて日常的な場面のみであるかのような印象を受けるかもしれない。しかしながら、先行する第三五〇節で「哲学者ならば、数学や論理学の真理とは違うことを知<sup>い</sup>つて、と自分にも他人にも納得させるために、『私はあれが木であることを知っている』と言うかもしれない」などとし、さらにすぐ後に続く第三八九節では「ムーアは、物理的対象に関する命題をわれわれは本当に知ることができ、ということを実例によって示したかったのだ」などされてお<sup>り</sup>、これらのことを考慮するならばこの「具体的」という表現は、「哲学的」に対比されての「日常的」「非哲学的」を意味しているというよりは、むしろ「一般的」という語と対比されて、「ある特定の状況や特定の脈絡において特定の相手に自分の見解を伝える」ということを示す表現として用いられていると考えるべきであろう。

- (13) なお、ここで「表出」とされているのはドイツ語の *Äußerung* の訳であるが、この語はワイトゲンシュタインにおいては、殊に「直接的」あるいは「自然な」「真の」などの形容詞ともに用いられるときには、彼独自の意味を持つことになる。それは一言でいえば、自分の持った感覚や知覚に基づく人間の本性的なふるまい、およびその言語的な代替物を示しているのである。このことは、例えば『哲学探究』中の、痛みについて述べられた以下の節に明瞭に述べられている。

「二四四 言葉はどのように感覚を指し示すのか。(中略) この問いは、どのようにしてひとりの人間が感覚の名の意味を学ぶのか、という問いと同じである。たとえば「痛み」という語の意味。言葉が根源的で自然な感覚の表出 *Äußerungen* に結びつけられ、その代わりとなっているということ、これはひとつの可能性である。子供がけがをして泣く。すると大人たちがその子に語りかけて、感嘆詞を教え、のちに文章を教える。かれらはその子に新しい痛みのふるまいを教えるのである。」

つまり、まずは子供の時の「痛み」という感覚を持つことに伴って自然に生じてくる「泣く」というふるまい、そして、次いで言語を学ぶことによって実際に「泣く」というふるまいの代わりに獲得していく、たとえば「痛っ！」と叫ぶといったふるまい——これらをワイトゲンシュタインは「直接的な表出」と呼ぶのである。

このことを踏まえるならば、第五二〇節において述べられているのは「私は……を知っている」という表現は、自分が特定の知識を所有していることを主張するといった理性的な働きをもつものではなく、むしろそれは、例えば「目の前にあるタオルをその存在を疑うこともなく端的につかむ」といった人間の本性に基づいた自然なふるまいの言語的代替物である」ということであるのだと考えられる。

- (14) 第四七〇節中で、自分の名前に関する命題が「即座に確定できず」「疑うべき真理とは考えられない」とされているのは、これ

らの諸命題が、世界に関する諸命題のように共同体からそのすべての成員に「世界像」として共通に与えられたものではないため、このような世界に関する諸命題と同等の資格をもって確実な命題とは言えないということによるのだと思われる。これについては本論注19も参照のこと。

- (15) ムワイヤル＝シャルロックは、『確実性について』についての研究書中で、ウィトゲンシュタインが挙げた種々の枠組命題を「言語的 linguistic」「個人的 personal」「局所的 local」「普遍的 universal」の4つのタイプへと分類する(Moyal-Sharrock, D(2004a)。この「言語的」は、例えば「この色は日本語で青と呼ばれる」「2+2=4だ」など我々の言語使用を決定する文法的な規則を、「個人的」は自分の生活史や名前などに関わる事柄（これを彼女は「自伝的 autobiographical」と下位分類する）や、自分の知覚や感覚・感情状態に関わるもの（これを「知覚的 perceptual」と下位分類する）を、「局所的」は、例えば「今まで人間が月に行ったことはない」「地球は丸い」など同時代的、あるいは部分的な共同体において妥当であるものの経時的に、あるいは共同体が変わることによって変化するものを、「普遍的」は、例えば「物体が存在する」など時代・地域に関係なく妥当であるものを、各々示している。ここでこの考えを踏まえるならばウィトゲンシュタインは、第四部までは基本的に、その時代の人たちに流布しているという意味においていづれも「公共的」である、「言語的」「局所的」「普遍的」の三種の枠組についてしか念頭に置いていなかったのが、ここにいたって「個人的」な枠組、殊にその内でも「自伝的」な枠組について問題にし始めたというであろう。

- (16) 「四二四」「私はPを知っている」と言うのは、私もPなる真理をわきまえている、と人々に保証するためである。そうでなければ、単にPの強めとして言うのである。」

- (17) 「五三一」従って木の前に座っているムーアが「私はこれが……である」と知っている」と語ったとき、彼はその際の自分の状態について述べているに過ぎないのである。」

「五七五」「私は知っている」という言葉は、どの点について私が信用できるかを示す役割を持つている。」

- (18) このような「私的な」枠組命題のうち、その一部は先行する成員から教えられて獲得されるのであり（たとえば自分の名前など）、また他の一部は教えられることによるのではなく、各個人が自ら獲得していくものである（例えば「自分は今までフランスに行ったことがない」といった自伝的な枠組など）。

- (19) このような対立が生じる場面の例として、ウィトゲンシュタイン自身は、例えば、「誰々が今日の午前中私と一緒にいた」という自分の主張に対して他人が「それは間違いではないか」と反論する場合を挙げている（第六四八節）。

なお、このような「自分の過去の記憶」のようなものがそもそも枠組命題と言いうものであるのかということに疑問を持たれることもあると思われるため、本論の先行する箇所と多少重複する点を含むものの、ここに若干のコメントを付け加えておく。

先に記したように、ムーアの論文「常識の擁護」を読んだことがウィトゲンシュタインが一連の考察を始める重要な契機となっていることもあつてか、『確実性について』で当初考察の対象として最も中心的に取り扱われていたのは、(契機となったムーアのもう一つの論文「外的世界の証明」に由来する「ここに一つの手がある」と並んで) 例えば「自分の誕生のはるか昔から大地が存在したことを知っている」などの、「常識の擁護」中でムーアが、「我々が世界のあり方について一般的に持っている常識的な命題」として挙げた諸命題であつた。ウィトゲンシュタインはまずはこれらの命題についての考察の中で自身の枠組命題という概念を形成していったのであつた。それゆえ、当初『確実性について』において枠組命題は、以下の二つの特徴をもっていた。

① それらの諸命題は、世界のあり方などの公共的なことに関する、確実な命題として受け入れている。

② それらの諸命題はそれ自体疑いえないものとして判断の基盤となっており、それらの諸命題と別の命題とが齟齬をきたすようであれば、後者の命題の方を誤りとして退けることとなる。

このように当初枠組命題は①のような命題の内容に関する特徴と、②のようなその論理学的な特徴との両面から規定されていた。ここでウィトゲンシュタインが枠組命題の体系を「世界像」と名付けたのは、この①の特徴に引きずられたというのもあるのだから。

それに対し、『確実性について』第四部で例えば自分の名前のような私的な枠組命題の存在に気づくようになってからは、次第に枠組命題が上記の②の特徴のみから規定されるようになり、①については全く鑑みられなくなってきた(それゆえ第四部においては「世界像」という語は全く使われていない)。このため、第四部においては、例えばつい最近の印象的な出来事に関する記憶のような、自分の記憶のうち特徴②を満たすものも枠組命題として取り扱われるのである。

(20) Von Wright (1971)

(21) Stroll (1994)

(22) ストロールは、従来の基礎づけ主義者の立場が、不確実な「知識」の根拠に確実な「知識」を求めるといったように、基礎となるものの基礎づけられるものと同種のことを求めてきた「同質基礎づけ主義 homogeneous foundationalism」であるのに対し、ウィトゲンシュタインは、知識を基礎づけるものとして原初的な反応や行為を措定する「異質基礎づけ主義 heterogeneous



foundationalism」を提唱しているとす

- (23) Moyal-Sharrock (2004a)
- (24) Moyal-Sharrock (2004b)
- (25) Moyal-Sharrock and Brenner (2005)
- (26) 例えば先に記したような「個人的」な枠組命題に関する考察など、“標準”解釈の枠を超える可能性を持った考察も部分的にはあるのであるが、しかしこれについても結局は従来の共同体的な「世界像」との関係からのみ議論されてしまうこととなる。
- (27) 鬼界 (1998a) (1998b) (1998c) (1999) (2000) (2001) (2003)
- (28) 鬼界 (2001) p.158-159.
- (29) 「個々の具体的言語ゲームの局面において各言語使用者が個人として体験する特別な確実性／自明性が私的確実性であるのに対し、そうした実践から硬化という過程により生まれた規則命題が知的共同体において持つ確実性が公的確実性なのである」(鬼界 (2003) p.400)
- (30) 「論理の確実性は化石化した私的確実性なのである。」(同 p.401)
- (30) なお、紙数及び本論での主要な論点との関係などから、ここでの『確実性について』の解釈史に関する記載、本論の論点と他の研究との比較などについてはいずれも不十分なものとならざるを得なかった。これらの点については今後改めて別の論文で発表する予定である。
- (31) ムワイヤル＝シャルロックの用語を使えば「局所的」。

